

	<p>2016年 9月15日 第116号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://mizumidori2.eco.cocacn.jp E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	---

バッタ広場の生き物

バッタ広場は赤塚城址の山の上（草原）の一角にあり、畑にしたらさぞよく育つだろうと思われる日当たり抜群の場所で、ボランティア（いたばし水と緑の会）が生き物の棲息環境を考えて、頻りに草刈しない草地として管理をしています。

バッタ広場の植物

草地は常に刈り取られて維持されてきたので痩せ地だったはずですが、バッタ広場はできてから15年、落ち葉や刈った草が積もって栄養たっぷりになり、本来の草原と異なってきて、肥沃な土を好む植物の適地となっているのかもしれませんが。

年1回（または2回）、6、7月（と9月）にバッタ広場の植物調査をしています。最初は方



形区を決めて調査しましたが、今は、南北に糸を張ってライン上の植物を1mごとに記録しています。クズやササを刈り、外来種を抜くなど、手を加えているので、植生の自然の移り変わりを見る調査ではありませんが、バッタ広場の植物の様子を把握しています。

4月末のバッタ広場（5月から夏にかけて植物達はせいっぱい生長します）

一見してありふれた雑草だらけですが、ヌスビトハギ、ハエドクソウ、ヒメジソ、ガガイモ、ヤブヘビイチゴなど、道ばたや公園ではあまり見かけない植物も生えています。



ヌスビトハギ(左)、ハエドクソウ(右)、ヤブヘビイチゴ(下)

今年の植生調査は6月11日に実施しました。昨年から今年とはんぼ池の作業が増えて、バッタ広場には手が回らなかったため、凄まじい勢いでクズが繁茂し、実生木やアズマネザサの上に屋根のようにかぶさり、強いアズマネザサもクズには負けそう。カゼクサなど丈夫なイネ科植物もクズの屋根の下で弱々しく生きていました。バッタ広場で悩ましいのは強者のクズとアズマネザサですが、実生木も放置できないので、2、3年に1度、生垣を除いて全部根元から切っています。



バッタ広場のことを客観的に考えたいと思い、昨年の夏に神代植物公園生物多様性センター主催の「東京らしい草原の姿とは」という講演（講師：東京大学大学院農業生命科学研究所 根元正之先生）を聞きに行きました。

草原というと芝生のように人間が憩える草地を考えますが、草原は草丈の低い草原だけではありません。高茎型（ススキ、オギ、セイタカアワダチソウ）、中茎型（チガヤ）、ツル型（クズ、ヤブガラシ、アレチウリ）、攪乱頻度適応型（人手によって刈られても適応する植物のこと。アズマネザサは、放置すると竹のように成長し、刈られると芝のようになって刈り込みにも耐える）があります。また日本らしさを演出する裾刈り草地（樹林地に接した草地—マント群落—林の縁部で、低木やツル植物が繁り、内部の乾燥を防ぐ。草の繁っているところを「ソデ群落」と呼ぶ）の重要性も含めて、草原は景観的にも重要な場所で、生物多様性のホットスポットであると訴えられました。板橋区の広大な荒川河川敷はそういう草原です。公園は芝状の草地が多く、赤塚城址も年4回草刈をしています。樹林地を覆うマント群落はありません。草原は人間が手をかけ続けて維持されてきた場所で、放置すると藪から森になってしまいます。以前、環境省の中沢さんの紹介で乗鞍岳の麓にしらかばの木を切りに行ったことがありました。

乗鞍では、牛が放牧されなくなって草原は役割を失い、色鮮やかなツツジが咲く高原の風景がシラカバの森になりつつありました。そこで地元では森への遷移を止め、草原の自然を再生する取り組みをしていて、その一環としてボランティアとしてシラカバ伐採のお誘いを受けたというわけです。阿蘇山では草原環境を維持するために定期的に火入れを行っています。

嫌われ者のクズとアズマネザサ 昔は大切な資源だった

広大な放牧地でなくても、草は、家畜の餌、屋根葺き、堆肥等に利用され、篠竹（伸びたアズマネザサなど細い竹）も野菜の支柱や土壁の芯等に利用されていました。板橋にも昭和40年代まで牧場があったし、瀬田さんは子どもの頃飼っていたウサギの餌にクズを採りに行ったそうです。家畜の食料源であるクズは厄介者ではなかったのです。

アズマネザサはどうでしょうか。最近、散歩の途中で、解体中の古い家を見かけました。建物の板壁だと見えたところは、実は裏が土壁で、細い竹を編んだ芯と藁のような植物が混じった土が散らばっていました。このまま保存しておきたいと思ったほど、自然の材だけでつくられた芸術品でした。写真に残しましたが、普通の更地になってしまいました。壁の土はそのままでもよい畑地になれそうでした。自然を余すところなく利用していた時代の知恵も頭脳も技術も私たちにありません。これから自然とどのように向き合っていけるのでしょうか。

バッタ広場は生き物のにぎわいに貢献している大切なスポットです。

講演は景観の面からのお話でしたが、日本人の美意識が失われ、草地に対して汚い、とか違和感を持つ人が増えて環境教育の場がなくなったと嘆いておられました。また草地の維持管理が課題だということでした。とくにアズマネザサとクズは、日本産の植物でありながら維持管理上非

常にやっかいだと話されました。ああ、やっぱり。

会では6月に2回、7月に2回、クズを抜いたり、刈ったり、及川さんをお願いして刈り払い機でササ等を刈り、みんな大汗をかいてクタクタ（写真左 暑かった）。あまり手をかけずに自然を残す方法を考える必要があります。



バッタ広場の他の植物から

アイビー（ヘデラ 写真右） 城址の樹林地にはキヅタ（常緑のツタ）が生えていますが、バッタ広場には人知れず園芸種のアイビー（常緑ツタ）が生えており（2006年の調査から記録あり）、年々増えています。

アイビーはグランドカバーとして植えられたり、室内用の観葉植物が飽きられて捨てられたりしたのをよく見かけますが、優しそうな姿に似合わず、ちぎれた葉や茎から根を出しはびこり、バッタ広場の被覆面積を広げて、抜き取りに苦労しています。

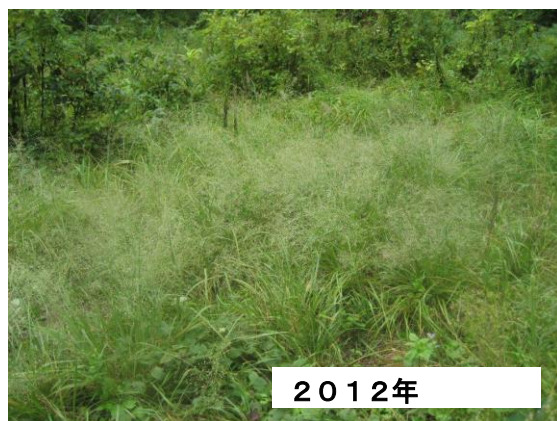
外来種（抜き取ります） 多いのはコセンダングサ、セイトカアワダチソウ、ヨウシュヤマゴボウ、新たにアレチヌスビトハギ（右）が侵入してきた。

減った植物は、ガガイモ、チカラシバ

ガガイモ クズが繁茂してガガイモは1カ所だけ。毎年ガガイモの花に甲虫類が集まっていたが、今年は非常に少ない。



チカラシバ（左：イネ科の多年草）は同じようなイネ科の多年草のカゼクサ（右）に定位置を奪われ、年々やや日当たりの悪い場所に追いやられてる??



報告「バッタ広場の虫しらべ」(バッタ広場の生き物は次号で紹介します)

昨年は会員だけでなく、赤塚公園サービスセンターと共催で、一般の参加を募集し、親子連れが参加し賑わいました。今年は、台風の予報が日々変わり、予定日も予備日も雨。延期もできないので小雨でも観察しよう、ということになりました。カッパを着て自転車に乗って、小学生とお母さんが来てくれて感激。早速クルマバッタモドキとオンブバッタを捕まえました。土砂降りではなかったものの、雨はしっかり降り、時々雨が止むと蚊の大群がまとわりつき、ボコボコに刺されながら、それでも探せば虫もいて満足しました。

バッタ広場の生き物の様子を知るために、今年は観察会本番の前後にも何度か出かけました。7月に入って、バッタ広場はクズに覆われると、生き物の種類もめまぐるしく変わりました。イネ科植物を食べるショウリョウバッタは7月には多かったのですが、8月31日にやっと1匹見つけただけ。が、なんでも食べるオンブバッタは多数棲息、草原にいるイナゴはいなくて、藪にすむツチイナゴがいた、ガガイモの花に多数いたコアオハナムグリも、ガガイモが減って見つからず、等々、バッタ広場の環境の変化は虫たちも影響を与えたようです（坂本 郁子）。

私のエコ園芸

狭庭でエコ園芸を楽しんでいることを、折に触れ話題にしてきたが、事務局の要請によりエコぶりの一端をとりまとめた。

エコ園芸では出来るだけ費用をかけないこと、すなわち種や苗、肥料を買わず出来るだけ自前で賄い、やってくる害虫は多いが殺虫剤はできるだけ使わず捕殺に努めている。退治しても毎年オンブバッタは沢山生まれるので、捕殺しているが一向に絶えないが、ショウリョウバッタで見られる薄茶色の雌もいるので、殺し損ねてしまうのかもしれない。果菜類などに色々な羽虫が来て葉を食い荒らし、トマトにはニジュウヤホシテントウムシが葉を舂めまわす。一時葉っぱにエカキムシ（画描き虫？）が庭中の花木に現れたが、こればかりは根から吸わせる薬剤に頼るしかない。

草花や野菜は花後の種をとり毎年種から育てるようにしているが、プリムラ・マラコイデスや、ホウセンカ、マツバボタン、それにインパチエンスなどは種を採らず、こぼれ種から庭に生える実生を鉢やプランターに拾い上げて育てるようになり、種の保管の面倒や播種の失念の問題も解消し育苗の手を省いている。

葉菜類の春菊や小松菜、アブラナなどは、あらかじめ数株を鉢に移し植えて、花を鑑賞したうえで種を採ることにしている。鉢どうし出来るだけ隔離するが、狭庭では少しずつ交雑も進んでいるようだ。サヤエンドウは採り忘れて硬くなった実を翌年の種に回しているが、豆苗を3回刈り取って食した後の根元を育てたことがあるが、花は翼弁が赤く（サヤエンドウは全体が白）スイートピー同様に鑑賞できるが、サヤ自体は硬くて食用には不向きで、グリーンピースなどとしての利用しかないようだ。

果菜類の筆頭はトマトだが、種は当然食べた実から採ったものだ。春先に陽の当たる窓辺で鉢にまいて育てるが、苗を買って育てるのに比べて収穫は遅くなるが、苗を育てるのも園芸と楽しむことにしている。最近は季節に関係なく野菜が出回っているので、シーズンに種を得るのに苦労しない。



種採りと鑑賞を兼ねたシュンギクの花



発芽数日のミニトマト

トマトの苗は1畝5本で済むので、余った苗を鉢植えにして鑑賞を兼ねることもある。鉢植えの方が日当たりのよい場所に移動して育てられるので、畑に植えたものより成績は良い。

つる性の果菜類はゴーヤ、小玉スイカ、トウガン、カボチャ、マクワウリなどを育てたが、緑のカーテンにはゴーヤのほかトウガンを作った。小玉スイカ、カボチャ、マクワウリなどを大鉢にアンドン仕立てで育てることもある。実は小ぶりのものが1つに制約されるが観察の楽しみが増える。



トウガンの緑のカーテンも種から



種から育てた鉢植えの小玉スイカ



水盤のヤツガシラの葉

日当たりの悪い庭に向いているのではないかと、ここ数年楽しんでいるのが里芋だ。水盤で鑑賞したヤツガシラを畑におろしたところ、葉柄が1m位にも育つ普通のヤツガシライモだった。よく育つ葉茎（ズイキ）は茹でて三杯酢にすると、暑い夏には絶好の箸休めになり食が進む。葉は新陳代謝で株の外側から自然に倒れて枯れてゆくので、倒れる前に順次もぎ取って食しているが、芋の育ちにはほとんど影響していないのではないだろうか。秋の終わりには芋と全部のズイキを収穫して、芋は来年用の種イモを除いてズイキ共々胃袋に収めている。葉柄のほとんどを食べる葉菜でもあるようだ。鉢で育てたもので変わったものといえば、サ

ツマイモがある。大鉢に挿し苗して長い支柱に巻き上げて固定（自力では巻き付かぬため）して狭い場所で栽培したことがある。苗はサツマイモの端（生っている側）を少し大きく切り取って水盤に入れ、芽吹いた苗の1本をつかった。採れる芋は大きいものだとして1個だが、朝顔（同じヒルガオ科植物）に似たロート状の花が咲き鑑賞できた。乾きやすい鉢植えでは花が咲きやすいようだ。

実のなる植物は花を見てから食べる楽しみがあるので好きで、カキやユズ、キンカン、リンゴ、モモ、カリンなど色々と自分で接ぎ木した果樹がある。イチジクは挿し木で幹回り30cm位まで育てたが、狭庭にはこれ以上は無理と伐採し挿し木で更新中であるが、切り株や根が中々腐ら

ないのは何故だろう。果樹では西日除けに垣根仕立てのブドウが2種あるが、白実の早生種は赤塚のブドウ園で選定していた枝をもらい挿し木したもの、他方は食べた種（近頃は種なしが多いが）を蒔いた巨峰だ。ブドウはカナブンが葉を喰い荒らし、実が熟れると掛けた袋を食い破って中の実まで食い散らかす大敵。カナブンはイチジクも大好きで熟れた実にはカナブンの団子ができたことがあり、イチジクの実にはアカボシゴマダラ蝶もやってきた。ブドウの葉を食っているころ、棚をゆすってカナブンを落として踏みつぶすが、逃げ足が速くていつも何匹かは取り逃がしてしまう。晩生のブドウが熟れる頃はカナブンも大分減り袋かけをせずに済んでいる。カナブンは矢鱈と卵を産むので、鉢植えの花木に衰えが現れたとき、鉢土をぶちまけると幼虫がぞろぞろ現れることがある。こんな事を知らずに根を丸坊主になるまで食われ、大事な植を何本か枯らしてしまった経験がある。



果樹の被害といえば、何年前になるが早生のブドウを全部食われた年があった。沢山の皮だけがペシャンコになって落ちていたので、高い処に登れて皮を吐き出す習性から、出没の噂があるハクビシンの仕業であろうと、同様の被害を受けた近所の人と合点した。

イチジクの実に集まったカナブン、シロテンハナムグリやアカボシゴマダラ

食べた巨峰の種から育った実

草花では多年生の植物や宿根草・球根植物がエコ園芸には欠かせない、植え替えの手間は必要だが、毎年花が楽しめるので大好きだ。チューリップやヒアシンズなど春咲き球根植物では、花後のプランターなどに、そのまま一年生の草花を植えて秋まで鑑賞し、秋に球根を堀上げ植え替えることで、球根の保管の手間を省くと同時に、夏の暑さで球根が腐ってしまうのを避けられるので、採用することが多い。

肥料には土の改良を兼ねて腐葉土をたくさん使うが、区の助成があったコンポストに野菜くずや畑・庭から出るごみの植物を腐らせているが、生野菜のくずや庭の草木を生のまま使うと水分が多すぎビチャビチャするので、庭で少し乾かしてから使かうほか、かき集めた落ち葉を沢山混ぜている。落ち葉は近くの公園や道端からもらっている。コンポストでは、捨てたカボチャの種が芽を出し10cm位に伸びてモヤシになっていたの、見るにしのびず一本を抜いて鉢で育ててしまったことがある。

狭い場所なのに多くの植物をポットや鉢で育てていて、季節によっては朝夕の水やりや手入れで庭に出ている時間が長いので、幼い孫に「じいちゃんは庭に生えてる」と云われたことがある。水やりにホースはあまり使わず、如雨露（一回に真夏は30杯位にもなる）を持って歩きまわるので、草木に活力をもらっているようだ。（猪鼻昭二）

活動のお知らせ

運営委員会：9月24日（土）12：30～13：30

10月15日（土）12：30～13：30

作業・観察会の後に報告や活動内容などを相談します（ラーメンしらかば）。

連絡先；坂本（090-4618-1295）

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：11月19日（土）12：30～

活動の問い合わせは事務局 瀬田（3969-7124）まで

活動予定いろいろ

- 1 赤塚ピオトープ（赤塚トンボ池、大仏下ミニトンボ池、バッタ広場）の環境整備と観察。
集合はいずれも赤塚トンボ池前（板橋区立美術館そば）

9月は生き物がめいっぱい活躍する季節です。夏の観察会は雨で不完全燃焼でしたので、10時からバッタ広場の虫調べ、11時から草刈とします。草の成長はそろそろ終わりです。とんぼ池では、ザリガニを捕りに来るのかカワセミを見かけます。水が多くて池の作業はできませんが、フェンス際の草刈や折れたスタジイの枝の整理等が必要です。

9月24日（土）10：00～11：30 バッタ広場

10月15日（土）10：00～11：30 未定

11月19日（土）10：00～11：00 未定

- 2 成増1丁目向新田の森 樹林地調査と必要に応じて草刈をします（小雨実施）

10月22日（土）10：00～11：00 現地集合

- 3 日暮台公園樹林地の観察プラスα

（樹林地内の推移と林縁植物を観察、様子を見て林縁の草取りを少々）

10月1日（土）、11月5日（土）いずれも10：00～11：30

日暮台公園前集合

● いたばし水と緑の会のURLが変わりました。

<http://mizumidori2.eco.coocan.jp>

●ピオトープ管理のボランティア大歓迎

当会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、生き物のすめる水辺（赤塚トンボ池）や草地（赤塚公園バッタ広場）などの管理作業、自然樹林地の定点調査などを行っています。●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）お送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。